（別紙様式４－１）　　（県立高等学校・中学校用）

（熊本県立第一高等）学校　令和３年度（２０２１年度）学校評価表

１ 学校教育目標

「くまもとの教職員像」、「県立中学校・高等学校における教育指導の重点」、「人権教育取組の方向」、「特別支援教育取組の方向」、「県体育保健課取組の方向」及び本校の「白梅の精神」等に則り、「健全な心身の育成」、「学力の充実」、「地域との連携」を柱に、生徒一人一人の個性を伸ばしながら、心身ともに健全で叡智に富み、凜とした気品のある心豊かな人材の育成を目指す。
そのために、全職員が教育者としての基本的資質（①教育的愛情と人権感覚　②使命感と向上心　③組織の一員としての自覚）や専門性（① 生徒理解と豊かな心の育成　② 学習の実践的指導力　③ 保護者・地域住民との連携）の向上に努めるとともに、互いの連携と協力のもと、創意工夫を生かした教育の実践に努める。

２ 本年度の重点目標

（１）目的と目標の明確化による共通理解に基づいた協働体制の強化
（２）進路指導体制の充実による指導力の向上と第一志望の実現
（３）新学習指導要領を踏まえた授業改善及びＩＣＴを活用した学習活動の推進
（４）幅広い経験に基づいた自己変革力の育成を図る指導
（５）道徳教育と人権教育の推進

３ 自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	今日の教育課題に対応できる組織作りと組織間の連携	学校教育目標実現や課題克服に対応した組織作り	・新たな委員会の立ち上げと組織の再編成、他分掌との業務の調整	・定期的な委員会の開催ならびに各分掌間の協議の場の設定	B	・教育の情報化推進員会やスクールミッション策定委員会を立ち上げ、有効に機能させ、他分掌との連携、調整を進めることができた。
		組織間の連携の強化	・運営委員会を中心とした各部の連携強化	・各部、各委員会における入念な打ち合わせと関係各部の事前協議	B	・会議資料の事前起案を徹底することでチェック体制を強化することができ、よりスムーズな会の進行ができたが関係各部との調整をより図っていくことが課題として残った。
	信頼される学校	特色ある学校づくり	・２、３年生の特別クラスについて、特色ある取組の導入ならびに次年度以降の入学生についての再検討 ・英語コースにおいて更なる特色ある取組の検討 ・職員の共通理解に基づいたスクールミッションの策定 ・次年度からスタートする「COREハイス	・各学年等での意見集約後に、スクールミッション策定委員会での検討、その後の県教育委員会との修正案を学校運営協議会後の協議を経ての成案作成 ・県教育委員会との協議をもとに連携校との共通理解を図るとと	B	・特別クラスのあり方について、スクールミッション策定委員会での協議をもとに全職員での共通理解を図ることができた。 ・英語コースについては、コロナ禍の中行事について内容を再検討しながら生徒の満足度を高めることができたが新たな特色化までは打ち出すことはできなかった。 ・「COREハイスクール研究指定校事業」については県教

			クール研究指定校事業」について連携校との共通理解を図りながらの準備	に学校運営協議会での進捗状況の説明ならびに意見拝聴		委の指示を受けながら準備を進めることができた。しかし、初めての事業ということもあり、根本的な課題として県の準備が次年度に間に合うのかということがある。
		開かれた学校づくり	・保護者、地域、小学校、中学校、大学との連携	・新型コロナ禍でも実施可能なオンライン等を活用した連携事業の研究	B	・本校での学校説明会ができないかわりに中学生へのオンライン説明会を２回実施することができた。
	教育環境の整備	コロナ禍に対応し得るオンラインシステムの更なる拡充	・グーグルクラスルームの５教科での有効活用 ・一人一台タブレットの導入に向けた環境整備	・個々の教職員の活用状況に応じた定期的な職員研修の実施 ・教育の情報化推進委員会と事務部との連携による準備体制の構築	A	・コロナ禍の中、突発的に種々の対応を迫られることとなったが、教育の情報化推進委員会を中心として迅速に対応することができた。
	働き方改革	働き方改革に係る環境整備と教職員の意識改革	・教職員の平均勤務時間外在校時間の昨年度比１０％削減。 ・休日出張や土曜授業の振休の確実な申請と柔軟な対応による取得状況の把握と取得率の向上	・毎月開催の衛生委員会の昨年度からの改善 ・管理職面談や産業医面談による改善案の提示	B	・衛生委員会での協議内容を充実させるとともに管理職や産業医との面談も行うことができた。 ・教職員の時間外勤務時間については１２月時点で昨年度42時間から今年度は40時間と若干減らすことはできたが目標達成には至らなかった。 ・出張や土曜授業の振休申請を促すことで申請率は向上している。終日の振休については完全取得は無理でも少しでも取得できるよう働きかけていきたい。
学力向上	授業の充実	ＩＣＴ機器を活用した授業の実践	・全職員による最低２回の授業参観の実施	・２学期に約１か月の公開授業の期間を設けて実施し評価シートを導入	B	・同教科の授業参観は活発であるが、他教科の授業参観がより活発になるように働きかけたい。
			・ＩＣＴ機器を活用した授業をテーマとした研究授業及び授業研究会の実施	・全授業者を対象とした最低１回以上のＩＣＴ機器を活用した授業実践の取組 ・ＩＣＴ機器	A	・ＩＣＴ機器の利用が適切な場面について各教科で検討してもらい、失敗を恐れずに取組を始めることができた。

				を活用した授業に関する教科会の実施 ・授業評価アンケートの実施と活用（各学年：年２回）		・授業評価アンケートの結果を授業担当者に報告し、これまでの授業の振り返りに活用してもらうことができた。
	家庭学習時間の増加	各学年家庭学習時間の増加	・平日２．５時間の家庭学習時間の確保	・宅習時間調査等で生徒の取り組み状況を把握し、授業の工夫改善等を教科会で検討 ・調査の分析を通して、担任との二者面談や教科担当者面談の実施	B	・アンケートの実施方法や結果の還元についてはスムーズにできたと考えられるが、宅習時間自体は昨年度からの伸びは見られなかった。
	新しい観点別学習評価の在り方	観点別学習評価方法の確立	・観点別学習評価を取り入れた指導計画（シラバス）の作成	・先進事例の調査・研究の実施 ・本校に合わせた形で本年度中に試験的に運用	B	・研究指定校や先進校の事例を参考にして本校の様式を定めることはできた。運用については、次年度実際に動かしながら検討を進めていきたい。
キャリア教育（進路指導）	夢実現に心を燃やし主体的に進路を切り拓く生徒の育成	進路情報の共有化と発信	・進路環境や生徒の現状に関する情報の発信と共有化推進	・３年進路検討会、１～２年学力分析会の実施と充実 ・「進路ニュース」（年４回）の発行 ・進路委員を用いたキャリアガイダンス情報の提供 ・進路だより等を用いた高大接続改革等に関する情報発信	B	・進路検討会、学力分析会を予定どおり実施することができた。今後の指導の方向性を確認する有意義な会となった。進路だよりは月に１回のペースで発行できた。進路委員をもっと活用すべきであった。
		教科指導力及び進路指導力の向上	・各教科との連携強化による職員の教科指導力及び進路指導力の向上	大学入試説明会等参加の促進及び情報の還元 ・難関大指導研究会（校内）の実施 ・大学入学共通テストに関する分析	B	・コロナ禍のために研修会や入試説明会の中止が相次ぎ、情報収集や研鑽の場があまりなかったが、校内で難関大学研究会を実施し、２０名を超える参加があり意見交換、情報収集の貴重な場となった。
		進路志望実現に向けた、生徒自身の主体性向上	・進路志望実現に向け、生徒が主体的に	・オープンキャンパス等（オンラ		・コロナ禍のために様々な行事が中止となり、生徒の活動や学習の場が限

			選択し、探究し、活動する環境の整備	イン含む）への主体的参加の促進 ・キャリアガイダンス（出張講義）の実施（年間１０回以上、平均参加者３０人） ・各種ボランティアやシンポジウム等への主体的参加促進 ・受験の手引きの活用促進 ・進路資料室の整備と利用促進	B	られてしまった。キャリアガイダンスは参加者の平均が約４０名ということで、積極的な姿勢が目立った。資料の活用についても促すことができた。
生徒指導	生徒指導の継続と徹底	基本的な生活習慣の確立	自己管理の徹底 ・整容（身だしなみを整える習慣） ・時間厳守の徹底 （時間を守ることで遅刻を無くす） ・礼節の徹底（発声挨拶）	・整容指導、礼節指導、遅刻指導の実施 ・定期的に整容指導（検査）を行い、身だしなみを意識させる。 ・授業開始や集会など５分前には集合できるよう指導する。	B	・コロナ禍の影響で生徒を一斉に集めての整容指導はなかなか難しく、クラス単位での検査中心になってしまったことは反省事項である。 ・礼節や時間を厳守することについては常に意識させることである程度定着したように思える。ただ、限定的ではあるが朝の課外に遅れる生徒が一定数いたことは課題である。
		通信機器の使用に関するマナーの向上を図る。特にネットモラル（SNS）に関する指導を徹底する。	・スマートフォンの使用に関するマナーの育成。	・ＳＮＳ等のトラブル回避のためモラルに関する教育を授業や研修会等で実施する。	B	・ＳＮＳ等のトラブル回避について情報の授業やトラブル回避に関しての啓発リーフレットなどを活用し指導を行っているがモラルの向上までには至っていない現状である。
	自主自律の精神の育成	規範意識の高揚とリーダーの育成	・一高祭体育部門や文化部門及びその他の学校行事を充実させるため生徒会活動の活性化を図る。	・生徒会を中心に、組織の中で生徒が中心となって企画運営に携わり充実させる。 ・リーダー研修会を実施し、生徒会や各部活動や団体組	A	・コロナ禍で活動内容が大幅に制限されるなか、生徒会中心に企画・運営に当たり、体育部門から文化部門を中心にした学校行事を見事成功に導いてくれたことはあらためて生徒の無限の可能性を感じた。 ・各部活動の部長

				織のリーダーを育成する。		を集めリーダー研修会を実施した。各部で抱えている課題を他の部活と共有することで連帯感が生まれ、課題解決に向けて建設的な話し合いがもたれたことはよかったと思う。
人権教育の推進	教育活動全体を通じた人権教育の推進	職員、生徒の人権意識の高揚	・人権教育推進の年間指導プログラムの実践	・３部合同の教育講演会の実施（年１回） ・教育相談部と合同の職員研修（年３回） ・各学年人権LHRを実施（年３回）	B	・講演会は、ストレスマネジメント教育を行い、自身の精神のコントロールができる能力を培った。 ・LHRにおいては、１年の実施日が変更されたが、各学年で設定した課題の活動を行うことができた。
	「命を大切にする心を育む指導」の推進	自他の「命」を尊重し、慈しむ態度と心構えを育む取組、及び自らの自尊感情を高めるためのストレス対処に関する取組	・教科指導や学年（学級）指導等、全ての場面で「命を大切にする心を育む指導」を根底に据えた教育の実践とストレス対処プログラムの実施	・「命を大切にする心を育む指導」プログラムを周知する。（各学期１回） ・生徒人権委員会実施（月１回）	A	・文部科学大臣ならびに孤独・孤立対策担当大臣のメッセージを生徒及び保護者へ安心メールでＧＷ、夏期休業、冬期休業が明けた３度にわたって配信した。 ・オンラインで開催された人権子ども集会（１２月）に生徒１７人が参加し、人権意識をさらに向上させた。
いじめの防止等	健全な人間関係の構築	いじめ根絶に向けた取組	・いじめ防止の年間指導プログラムの実践 ・いじめに関するアンケート実施と結果への組織的対応	・毎月１０日（祝祭日土日は前後の日）を「いじめ防止の日」として、「いじめを許さない宣言文」を宣誓（年１０回） ・生徒人権委員会主導でのいじめ防止につながるための標語作成（年１回） ・いじめについてのアンケート実施（年４回）と結果を受けての組織的対応	B	・年度当初、生徒必携「凛」を持参し、行っていたいじめを許さない宣言文は、生徒人権委員が電子黒板に投影するスタイルに変更した。また、当番制で人権委員が各階を巡回し、サポートした。放送部の協力を得て行っているアナウンスは、好評である。 ・２年生は、スクールサイン登録について学年集会で説明した。 ・人権委員便りを各学期末に発行し、２学期からは、D１netへ掲載している。 ・いじめについてのアンケートは、各関係部署と連携を図り、慎重に行うことができた。
特別支援教育	気づきと理解に基づいた対応	特別な教育的支援や配慮を必要とする生徒の実態把握と具体的支援策の検討・実	・生徒が安心して学校生活を送ることができる環境づくり	・組織的な支援体制の構築（特別な支援や配慮を必要とする生徒へ	B	・部会や学年会、生徒理解研修を通して情報共有を行い、SCや外部の専門機関と連携して

		施		の対応） ・学年会、教育相談部会、校内委員会を通しての情報収集・共有と関係職員との連携 ・生徒理解研修による全職員の共通理解 ・ＳＣや外部機関との連携		対応することができた。可能な限り特別な配慮を要する生徒への対応を行ったが、相談室（別室）運用の改善が必要である。
地域連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙなど）	総合型コミュニティスクールの実働化	年間計画に基づいた学校運営協議会の計画的な実施	・学校運営協議会やコンソーシアムのあり方についての共通理解や基本方針の承認	・他の先進校の情報や資料収集を通した研究 ・年２回開催予定の学校運営協議会や年３回開催予定のコンソーシアムでの協議	Ｂ	・他校の総合型コミュニティスクールの実践例を参考にしながら本校の学校運営協議会やコンソーシアムのあり方について丁寧に説明し、共通理解を図ることができた。

４　学校関係者評価

第２回の会議は、コロナ禍でまん延防止等重点措置が出されていた期間ということを考慮して、一堂に会しての開催を見送ったことにより、書面で御意見等をいただいた。総じて、本校の教育活動全般については高い評価をいただいている。主な意見や提言等については以下の通りである。

・コロナ禍の中、生徒のモチベーション、心理的負担等様々な課題がある中で、生徒がプロジェクトを組み、課題解決に参加していることに関しては、評価も高く成果もみられるようである。
・課題解決に向けての生徒主体または参加してのさらなるプロジェクト化が必要である。
・進路に関しては、入試制度の変革、将来への不安など複数の要因が考えられるので、多様化の中での対応が大変であると思う。
・ICTのさらなる活用と生徒主体のルールなどの作成が望まれる。
・ダルトンプランの復活など、カリキュラムマネジメント能力、個性の伸長など第一高校の生徒の力を信じて頑張ってほしい。
・来校者に対する生徒の挨拶の良さ、教職員とも会釈を交わしあう雰囲気が良い。
・この素晴らしい環境で育ってゆく生徒達が将来さらに広い土俵で伍してゆくための精神をも育んでいってほしい。

５　総合評価

・生徒アンケートで「よく当てはまる」、「やや当てはまる」の割合が昨年度より低下している。やはり、コロナ禍による分散登校や各種行事の縮小等、通常の教育活動ができていないことが影響していると思われる。
・三者とも高評価の項目は例年と特に変わらない。逆に努力目標や三者の評価が分かれる項目の中で、「学校行事への積極的参加」について、生徒に関しては昨年より微増しているなど特には変わらないが、保護者の評価が大幅に低下している。やはりコロナの影響があると思われる。
・　昨年も課題となっていた「読書への取組」については、教職員との差はまだあるが、生徒については若干、保護者については大きく双方とも評価が上がっている。
・全体的に教職員の評価に比べて、生徒、保護者の評価が低いのは例年と変わらない。
・今年度も残念ながらコロナ禍で計画通りに行事や校外活動等を実施することができなかったが、オンライン開催や代替措置も可能な範囲内で行い、その中で新たな発見もあり、内容の見直しにつなげることができた。
・次年度から導入される「観点別学習評価」については、研究指定校や先進校の事例を参考にして本校の様式を定めることはできた。
・人権教育については種々の取組を行いながら、学期１回のいじめアンケートをもとに迅速かつ丁寧な対応ならびにSCとの連携を図ることで重大事態に発展することを防ぐことができた。

６ 次年度への課題・改善方策
・くまもとKSH構想に基づき、本校は「イノベーションハイスクール」に指定され、さらには来年度から「CORE ハイイスクールネットワーク事業」が本格的にスタートする。そこでは英語での種々の取組や遠隔授業、探究的な学びを行う。それに組織的に対応するために「D1L」という新部を設立した。英語科とも連携して上述した事業を進めていくことが課題となる。 ・英語コースの特色化についての検討が必要である。一昨年度末、海外修学旅行も検討されたが、コロナの影響で先の見通しが立たず中断している。他の取組も含めて次年度検討すべきであると思われる。 ・オンラインによる種々の取組はかなり進んできたと思われる。次年度以降も職員研修を充実させることでスキルアップを図っていきたい。 ・働き方改革については、衛生委員会の充実や分散登校中の部活動の停止、職員の意識の向上等はあるが、勤務時間外在校時間は微減にとどまっている。業務量自体は減らない中、時間の確保が課題となる。